

ケベックのフェミニスト・スタディーズのパイオニア、ミシュリンヌ・デュモンが語るフェミニズム史  
ーフェミニスト教育学の観点からの考察ー

L'histoire du féminisme, racontée par Micheline  
Dumont, une pionnière québécoise des études  
féministes : réflexion dans une perspective de la  
pédagogie féministe

矢内琴江  
YAUCHI Kotoc

はじめに

2008年、ケベックの女性史研究者としても、フェミニスト・スタディーズの研究者としても、第一人者であるミシュリンヌ・デュモン (Micheline Dumont, 1935-) によって、ケベックのフェミニズム史の入門書、『カミーユに語るケベックのフェミニズム』(Dumont, 2008) が出版された。デュモンは、ケベックの女性史を明らかにするだけでなく、女性史研究の理論構築や、ケベックのフェミニズム思想史研究によって、フェミニスト・スタディーズの理論的土台の構築に寄与してきた。本書は、フェミニスト・スタディーズのパイオニアである著者が、自身の孫の世代にあたる若者たちに向けて書いたものである。同書の書評を執筆したラヴァル大学のマリー＝アンドレ・ベルジュラン (Marie-Andrée Bergeron) は、同書を著者によるフェミニズム的なアクションの表明として特徴づけた (Bergeron, 2009, p.153)。そして、若者に向けて書いたという本書の意図を実現するために、様々な「教育的なツール」が効果的に用いられていることを指摘している。この点については、他の書評においても同様の指摘がなされている (たとえば、Hébert, 2009)。このように、本書は、著者によるフェミニズムの実践としての性格と教育的性格の両面をもっているといえよう。そこで、本稿は、この二つの特徴的な性格に着目して、歴史的観点からではなく、フェミニスト教育的観点か

らその意義を検討したい。フェミニスト教育学を定義することは簡単ではないが (Pagé *et al.*, 2018, p.7)、本稿ではフランス語圏におけるフェミニスト教育学に関する最初の論考から、次の説明を採用する。すなわち、『フェミニスト教育学』は、フェミニズムの観点から、つまり、社会的性差の変革に向けた実践を基底にしている知の総体によって、教授、学習、知、教育環境を検証する教育学」(Solar, 1992, p.267)である。

したがって、本稿では『カミーユに語るケベックのフェミニズム』を、フェミニズム史を学ぶための入門教材として捉え、同書ではフェミニズムがどのように描かれているのか、またその背後にある著者のフェミニズム観や教育観を捉えることで、同書がもつ教育的な可能性を明らかにしたい。

### 1. ミシュリンヌ・デュモンがフェミニスト・スタディーズの研究者になるまで

デュモンは、1935年にモンリアル市で生まれ、現在、シェルブルック大学名誉教授である。モンリアル大学文学部を卒業し、ラヴァル大学で歴史学の修士号を取得した。モンリアル市内のいくつかのコレージュで教鞭をとったのち、1970年からシェルブルック大学で歴史学の教員になる。1999年にシェルブルック大学を退職した後も、フェミニスト研究者として、活発に活動し続けている。フェミニズムの歴史や、フェミニズム思想史論集 (Dumont et Toupin, 2003) の編纂だけではなく、修道女の歴史 (Dumont et le Collectif, 1992) や女子教育史の研究に取り組んできた。しかも、個人による研究だけではなく、カナダ政府の調査委員会でも調査を行い、高校の教師たちとの共同研究も行った。そして、大学教育を通して、学生たちとともに、フェミニスト・スタディーズの道を切り開いてきた。このように、デュモンの仕事は、フェミニズムの観点から歴史研究を切り開くだけではなく、フェミニスト・スタディーズの研究者コミュニティの形成や若い世代の育成にも力を注いできたことがわかる。まさに、ケベックのフェミニスト・スタディーズの学問分野としての構築を研究と教育の両面から支えてきた第一人者といえる。

しかし、デュモン自身の告白によれば、研究者としての出発点では、彼女はフェミニストではなかった。自身の女性史研究者としての道のりと、女性史の歴史観や方法論の形成を相互関係的に描いた著作『女性たちの記憶をほりおこす－女性史に向き合う一人の歴史学者』(Dumont, 2002)の中で、デュモンは、多くの女子学生たちの様子を見ながら自身がフェミニスト研究者となる以前の姿を回顧している。デュモンがシェルブルック大学を退職した

1999年当時、多くの女子学生たちにとって、フェミニズムはもはや「過ぎ去ったもの」と見なされていた。その様子に、デュモンは自らの若い頃の姿を重ねている。

そのようなこと〔女子学生たちの無関心な様子〕を見ていたら、私自身のことを打ち明けたくになります。この若い女性たちは、1960年代頃、テレーズ・キャスグラン氏をテレビで見ていた時の、私自身のことを考えさせるのです。私は、この年配の女性のようになりたくありませんでした。確かに、私は女性の選挙権の獲得のための彼女の功績は認めていました。でも、女性の名においてであれなんであれ、何かの運動に身を投じるなんて、論外でした。(中略)

私は自分のことを「左派」だと思っていました。でも…認めなければなりません。私は、1960年代のフェミニズムの盛り上がりの中にはいなかったのです。(中略) この頃、私とはといえば、私生活のやらねばならぬことにつき動かされていました。結婚、フランス留学、妊娠です。(Dumont, 2002, pp.13-14)

このように、若い頃のデュモンは、フェミニズムと距離をとっており、他の多くの女性たちと同様に、結婚、妊娠、自身のキャリア形成に関心が向いていた。しかし、大きな転機となったのは、3人目の娘の妊娠でキャリアを一度休んでいた時に受けた、1967年に設立された「カナダ・女性の地位に関する調査委員会」(通称バード委員会)からの依頼である<sup>1</sup>。デュモンは、同委員会から、ケベック州の女性史の調査研究を依頼されたのだ<sup>2</sup>。これがきっかけで、デュモンは、より広く女性史にかかわる研究を行っていくことになった。当時のことをふり返り、デュモンは次のように述べている。

[バード調査委員会で書いた] この文章の最後の段落を改めて読むと、当時、自分がフェミニストではなかったということを認めざるを得ません。(中略) 私のものの見方は、非常に「中流階級的」であり、非常に改良主義的であり、非常に控えめであり、非常に「白人的」でした。そして、そのことに私は気がついていませんでした。私の女性の歴史に関する研究は、私の目を開かせたはずでした。否、私は、程遠いところにいました。私は、女性たちの現実を男性の視点で裏書きしていたのです。(Dumont, 2002, p.14)

1970年代に入ると、デュモンはフェミニズム運動の影響を受けつつ、多くのフェミニズム理論の著作に触れていく。そして、19世紀末には、すでに多

くの女性たちがフェミニズム的要求のために自らを組織化していたことに、デュモンは気がつくのである。しだいに、デュモンは、自らの研究の枠組みを検討し、フェミニズム的視点からの研究の枠組みを構築する必要性を痛感し始める。

私は、女性の歴史を書くというプロジェクトが、必然的に、伝統的な歴史についての批判的なパースペクティヴの発展によって支えられた、政治的プロジェクトであるということを理解しました。年月が経つにつれて、女性の歴史に関する研究は、しだいに、私にとって、女性の歴史の理論に関する研究を伴ってきました。この歴史に関するフェミニズム的考察は、普遍的で有力な物語を、わずかながらも動かし始めています。ところが、女性の歴史に関する理論的考察は、困難でもあるとともに、正当かつ必要な、さらには未完の試みなのです。(Dumont, 2002, p.17)

この後見ていくように、本稿で取り上げる『カミーユに語るケベックのフェミニズム』は、女性史研究の成果であると同時に、女性史の理論に関する研究の成果でもある。それに先立ち、デュモン自身のフェミニズム的視点について、彼女の主要な研究テーマである修道女の歴史の研究から明らかにしたい。

## 2. デュモンの研究におけるフェミニズム的視点

デュモンが、修道女の歴史に関する研究を行うきっかけになったのは、先述のバード委員会である。デュモンはなぜ、修道女をテーマに選んだのか。彼女はその理由について、次のように述べている。

私は、このある意味でパイオニア的なテキストの中で〔同委員会の報告書のこと〕、私にとっては重要に見えていた女性たちのカテゴリー、すなわち、修道女たちについて話すことを当然のごとく決めた。また、私は、非常に肯定的な見方で、修道女を紹介することにした。1969年に、修道女のことを肯定的に話すことは、奇妙に見えるかもしれないということに臆さなかった。執筆期間中の1968年から1969年とは、ご記憶の通り、旧い宗教体制に対するケベック社会の熾烈な批判の時代を指す。「シスター」は、長い間〔ケベック社会を〕支配していた聖職者至上主義社会のありとあらゆる名残りと同時に、抹消された。ある種の無鉄砲さが必要だったのは、次のようなことを主張するためで

あった。第一に、修道女たちは女性である（この自明のことについて考えるのはさほど愚かなことでもない。1968年、ピエール・パケットは、テレビ番組で、シスター・クレール・デュモンシェルに、大真面目に言った。「私はね、いつも考えていたんですよ、シスターであるっていうのは、女性であることを忘れることだって!」）。第二に、宗教的召命〔修道生活への召命〕は、女性たちにとって、市民社会の中で禁じられていた働きを行い、重大な責任ある地位を行使する可能性そのものであり得た、さらには、女性たちの憧れを実現するのにつながる道であり得たのだ。（Dumont, 1990, pp.30-31）

修道女が、ケベックの急速な近代化の中で、その歴史から抹消されようとしていたその時に、デュモンは、修道女に着目することにした。ケベックの歴史において、修道女は、三重に抹消されてきた。第一に、これまでの歴史記述では、他の女性たちと同様に修道女もまた女性であるが故に不可視化されてきた。第二に、修道女が女性性から隔離されて聖なる存在と見なされていた。第三に、近代化の中でのカトリック教会に対する批判の中で、教会的残滓として抹消されてきた。このようにして、修道女たちの現実、ケベックの歴史において不在にされてきた。そこで、デュモンは、フェミニズム的パースペクティヴからその歴史を描写しようとする。すなわち、第一に、修道女を女性という社会的カテゴリーで捉えること、第二に、修道女たちの歴史を肯定的に捉えること、第三に、修道女たちの修道生活への召命を、「個人的、精神的あるいは心理的な現象と見なすよりもむしろ、社会的側面スピリチュアルで、さらには、経済的側面で考える」（Dumont, 1990, p.31）ことである。それによって、デュモンが取り組もうとしたことは、歴史の構築主体としての修道女たちに光を当て、その歴史を立ち上げることであったといえる。そのことは、先述したように、単に修道女の歴史を詳らかにすることに留まらず、歴史研究理論の再考にデュモンを導いた。以下で取り上げる『カミーユに語るケベックのフェミニズム』においても、一貫して、歴史の構築主体として女性たちの歴史を記述すること、そして既存の歴史観を問い、新たな枠組みを提案することが試みられている。

### 3. 『カミーユに語るケベックのフェミニズム』について

#### 3.1. 同書の目的

まずタイトルの「カミーユ」とは誰なのか。本書を開くと、「カナダ全国女

性評議会の創設から1世紀後に生まれた、私の孫娘で、最初の読者、カミーユへ」とある。カナダ全国女性評議会 (Conseil national des femmes du Canada) とは、1893年に誕生したカナダで最初のフェミニズム組織のことである。その1世紀後ということは、カミーユは1993年生まれで、この本が出版された2008年当時は15歳であると考えられる。つまり、同書は、一人のケベックの女性史学者が、21世紀を生きる自分の孫世代に向けて語る、ケベックのフェミニズムの歴史である。そして、ここで語られるフェミニズムの歴史は、カナダ全国女性評議会の誕生に始まり、2000年代初頭の若い世代の女性たちのアクションに至るまでである。

著者の意図は、フェミニストたちが成し遂げたことを女性の英雄伝のように伝えることや、フェミニズムを過ぎ去ったものとして伝えることではない。「フェミニズムはまだまだこれからなのだ！」(Dumont, 2008, p.11)ということ、すなわち、フェミニズムの今日的な意義や価値を読者に届けること、それが著者の目的である。

### 3.2. 同書の構成

同書の構成を見てみよう。全34章からなる5つのパートと3つの挿話で構成されている。

- プロローグ 1890年代頃の17歳の少女たち
- 第1部 女性たちによる組織づくり 1893-1913
- 第2部 フェミニストたちの投票の要求 1913-1940
- インターリュード 1940年代頃の17歳の少女たち
- 第3部 市民となった女性たちの参画への試み 1940-1969
- 第4部 フェミニズムの隆盛 1969-1980
- 第5部 世界を変えるための仕事 1981-2005
- エピローグ 2008年の17歳の少女たち

まず、この構成の中で特徴的な「プロローグ」「インターリュード」「エピローグ」について検討する。それぞれ19世紀末、20世紀半ば、21世紀初めという3つの時期の17歳の少女たちの典型的な暮らしや教育の状況を挿話的に描いている。これら3つの挿話はどれも少女たちの名前で始まる。歴史とは、無名の人々の集まりではなく、名前のある一人ひとりの人生の集合で

あることが示唆されている。例えば、「プロローグ 1890年代頃の17歳の少女たち」のはじめを見てみる。

今は1890年。彼女たちの名は、エルネステース、ベルト、マリー、アントワネット、ユージェニー、イメルダ。17歳。彼女たちのほとんどがみな、学校に通った。彼女たちは、教理問答とお祈りをよく理解している。読み書きそろばんだって、兄弟たちよりももっとよくできる。何人かは、英語、音楽、文学、歴史を勉強しに、寄宿制学校に行った。しかし、寄宿制学校を卒業してからも勉強を続けることはできない。女の子たちには、どんなコレージュも、専門学校もないからだ。大学に通うことは禁止されている。イギリス系住民で、お金持ちで、プロテスタントでもない限り！（Dumont, 2008, p.13）

こうした挿話は、読者にとって、その時代の少女たちの一人ひとりの実際の暮らしに照らして、本書の中で語られているフェミニズムの歴史を読むことや、読者自身が自らの暮らしや社会状況をふり返りながら、この歴史を辿ることを可能にする。このことは、著者が、読者を受け身の存在として捉えているのではないことを示す。

次に、同書の構成がどのような枠組みから組み立てられているのかを見ていく。フェミニズムの歴史は、多くの場合、19世紀末から20世紀初頭にかけて女性たちが市民権や参政権の獲得をめざす第1波フェミニズム、20世紀後半の女性解放運動の第2波フェミニズム、そして昨今では、21世紀に入って以降、ジェンダー・スタディーズやクィア・スタディーズなどの影響を受けた若い世代による第3波フェミニズムという、波になぞらえた時代区分によって説明されることがある。しかし、先に見た構成からも明らかのように、本書はこうしたフェミニズムの歴史の従来通りの区分とは異なる構成をとる。著者は、従来の区分にそってフェミニズムの歴史を捉えることについて次のように批判している。

私は、我々が、フェミニズムを年代順のスケールに従って考えたり、「前」とか「後」といった概念を用いたり、様々な波を連想させるのは間違いだったということを主張してきた。時系列というのは、「前」が「後」を説明することで、それより先の分析に踏み込まないということを常に仄めかしている。ところが、ときに歴史的真実は、事実や風潮の無秩序の中に見出されるのだ。歴史

とは、非常に多くの場合、現実の混沌から、まさしく一つの歴史 (une histoire) を記述するために、始まり、中間、終わりのある一つの完結した物語 (un récit complet) を引き出させる試みなのである。我々は、選択された時間構造と合致しない一般化を乱す事実、思想、風潮を物語から巧妙に排除している。忘れてはならないのは、歴史とは、歴史的現実に関する言説だということである。(Dumont, 2005, p.62)

デュモンによれば、フェミニズムの歴史を記述しようとするとき、既存の時代区分で整理することは間違っている。既存の時代区分によって、女性たちの物語を分断することなく、「始まり、中間、終わりのある一つの完結した物語」、すなわち歴史を記述することが必要なのである。なぜなら、歴史学におけるフェミニズムの実践とは、女性たちも歴史の主人公であることを記述することであるからだ。この点を踏まえた上で、『カミーユに語るケベックのフェミニズム』の構成を今一度見てみる。すると、既存の時代区分に依拠しておらず、また、各パートのタイトルでは、その時女性たちが何を行おうとしていたのかが言語化されている。まさに、女性たちが歴史の構築主体であることを引き出す物語の構成になっている。

では、この物語の語り手は、著者のデュモンだけなのだろうか。この問いに答えるために、同書の重要な特徴である、問いの連鎖をあげたい。各パートは5つから9つの章で構成されており、問いが各章を接続する役割を果たしている。すなわち、各章は読者への問いかけによって終わり、その問いに応えるように、次の章が展開されるのだ。なお、この問いは、原文では太字で強調されて示されているので、本稿でも原文の通り表記する。それでは、一例として第4章を見てみよう。ここでは、カトリックの女性団体が結集することにより誕生した、最初のフランス系カナダ人のフェミニスト団体「全国サン-ジャン-バティスト連盟 (Fédération nationale Saint-Jean-Baptiste)」(1907年設立) について語られている。同章の最後は次のように締め括られている。

このように20世紀初頭には、ふみならされた道から外れて、社会における未知の責任を担っていくことを決心した多くの女性たちがいたのである。キリスト教フェミニズムは、彼女たちにとって、刺激的な枠組みそのものであり、だからこそ、彼女たちは、あれほどの熱心さで受け入れたのだ。このような



モンレアルのフェミニストたちの主な活動とは、どのようなものだったのだろうか？（Dumont, 2008, p.41）

この問いを受けて、第5章「活動するフェミニストたち」では、全国サン-ジャン-バティスト連盟の女性たちが、20世紀初頭のフランス系カナダ人社会が抱える様々な社会問題に果敢に挑んでいく様子が描かれている。このように、各章の終わりの問いかけは、読者もまた物語の紡ぎ手として引き込む働きをしている。

同書におけるその他の工夫として、豊富な引用がある。著者自身が説明している通り、その引用文が、実際には話し言葉として発されたものではなかったとしても、著者は極力、話し言葉のように引用している（Dumont, 2008, p.11）。さらに、その際の出典は、本文中に記すのではなく、巻末にまとめて掲載している。これは、学術書になじみがない読者への配慮である。加えて、同書には50点にも及ぶ写真が掲載されていたり、各パートの末尾には、転換点となる出来事の年表が付されていたりする。以上のように、この本が、ケベックのフェミニズムの歴史の入門書であるのは、著者が「この物語をすでに知っているだろうし、私がおく最近のいくつかの研究の中で発見した、非常に細かな点のほかには新たに学ぶことは何もない」（Dumont, 2008, p.11）と述べているような、フェミニズムの歴史に関する基本的な内容の本だからではない。むしろ、読者たちが、まさにケベックのフェミニズムの扉を開くことができるよう、細やかな工夫がなされている点にある。それは、読者が啓蒙すべき対象だからではない。読者もまた、「物語」を作る主体だからだ。

#### 4. 『カミーユに語るケベックのフェミニズム』が描くフェミニズム

では、同書ではフェミニズムとはどのように語られているのだろうか。「プロローグ 1890年代頃の17歳の少女たち」の末尾で、著者は読者にこのように問いを投げかける。

つまり、少女たちの大部分は、非常に限られた、保護された、厳しく監視された世界の中にいるのだ。彼女たちの母親のように、自分を待ち受ける運命に疑問を抱くことはない。ごくわずかなもっと勇気のある女性たち、フェミニストたちをのぞいては。しかし、フェミニストとは、誰のことなのだろうか？また、

フェミニズムとは、正確には何なのか？ (Dumont, 2008, p.16)

この問いを受けて続く第1章で、デュモンは19世紀末にフランスからヨーロッパに広がり、そしてケベックへと辿りついた「フェミニズム」という語を次のように説明している。すなわち、「この語は、社会における女性の隷属状態の位置に異議を申し立て、女性の権利を擁護するための要求を表明する運動全体を示すのである」(Dumont, 2008, p.19)。

そして、「フェミニスト」については、次のような主張をしている人々として説明されている。

基本的に、彼女たちの主張は、女性の劣等性は生まれもったものではなく、社会と文化に押しつけられているというものだ。したがって、彼女たちは、女性の隷属と呼ばれていることに関して責任をおうべき法、規則、伝統を変えさせようとしている。フェミニストたちは、女性を男性よりも劣っていると看做す、この隷属に対して反乱をおこしているのだ。彼女たちは、教育、労働、法といった、いくつもの前線で社会を変えようとする。(Dumont, 2008, p.20)

このように、フェミニストとは、女性の置かれた劣等的地位は、制度や伝統によってつくられているので、それらを変えていこうとする人々と説明されている。

しかし、おそらく読者は、同書を読み進めていくにしたがって、この定義に戸惑いを覚えることになるかもしれない。なぜなら、20世紀初頭のフェミニストたちが取り組んだのは、女子教育の整備や、女性労働者問題だけではなかった。母親という女性たちの役割から取り組んでいた、貧困女性の支援や、乳児死亡率問題、禁酒運動などは、当時のフランス系カナダ人社会が抱える社会問題の解決をめざすものだったからだ。したがって、フェミニストたちの活動は、女性たちの権利擁護にとどまることなく、社会の中で脆弱な状況にある人々の暮らしや命を支えたのである。また、女性たちは、社会問題への取り組みを通じて、運動を組織したり、教会や政府と交渉したりしていくための実践的な力を形成したのである。

女性たちの参政権獲得運動は、まさにこの活動と同一線上にあった。20世紀に入ったばかりの頃は、参政権を主張することにケベックのフェミニストたちは消極的であった。しかし、社会問題に対して行動していくために、政

治的平等の必要性が自覚され始めるのであった。

次第に、カトリックであろうがプロテスタントであろうが、フェミニストたちは、「もし私たちが選挙権を持っていれば、どれほど簡単なことか!」という結論にたどりつく。彼女たちが、政治的平等を要求していく世紀の初頭の何人かなのだ。今では〔1910年代頃になると〕、大部分のフェミニストたちが、選挙権の獲得を願っている。彼女たちは、司教や男性たちの権威のもとではなく、自分たちの間で団結することで、もっと自分たちの実効性を発揮できることを知っているのである。(Dumont, 2008, pp.46-47)

「第2部 フェミニストたちの投票の要求 1913-1940」は、ケベックの女性たちの選挙権獲得に向けた粘り強い交渉の年月を記述している。イギリスのサフラジェット (suffragette) たちの行動にくらべて、カナダの運動は、「全く派手ではない」が、「1913年初頭、イギリスの例に触発されて、カナダのフェミニストたちは、選挙権のための熾烈な運動を開始する」(Dumont, 2008, p.51)。第一次世界大戦、1930年の世界的大恐慌を経て、ケベックの女性たちが選挙権を獲得したのは、1940年のことだった。ケベックの女性たちの参政権獲得運動の中心にあった「女性の権利リーグ (Ligue des droits de la femme)」の代表だったテレーズ・カスグラン (Thérèse Casgrain) は「私たちの真の仕事は、始まったばかりにすぎません。投票は、一つの方法であり、目的ではないのです」と述べた (Dumont, 2008, p.80)。

カスグランのこの言葉の意味について、改めて重く考えさせられるのが、「第3部 市民となった女性たちの参画への試み 1940-1969」のはじめ、「第13章 第二次世界大戦のさなか」である。第二次世界大戦が深まるにつれて、フェミニストたちもまた、「戦争協力しなければならなくなる」(Dumont, 2008, p.87)。長年にわたって、女性たちは市民として社会参加するために苦勞してきたにもかかわらず、「政府は、戦争の需要に立ち向かうためにあらゆる女性たちの協力を必要とする」(Dumont, 2008, p.87)。多くの女性たちがボランティアに駆り出されたが、そのコーディネートを女性団体やフェミニスト団体が担うことになる。そこで活動する女性たちは、これまでの活動の中で、公的な場における実務能力を獲得してきたからである。しかし、女性たちは、自らを組織し行動を起こしていくための力を、いったい何のために培ってきたのか。女性たちは、何のために社会に、あるいは政治に真に参加

しようとしてきたのか。

さらに、第3部では、第二次世界大戦後、女性たちがどのように政治に関わってきたのか、特に労働者運動や、「静かな革命」における経験を記述する。また、女性たちは国際的な政治の舞台にも登場する。ケベックのフェミニストたちは、国際的平和主義団体「ヴォイス・オブ・ウィメン (Voice of Women)」に参加し、冷戦下における核兵器反対のために国内外の会議で発言をする。「ケベック州の女性たちは、平和のために集まり、地球上の女性たちとの連帯を発見する」のだ (Dumont, 2008, p.105)。

「第4部 フェミニズムの隆盛 1969-1980」を通して、フェミニズム運動は、社会的・政治的場面だけではなく、女性たちの性の自己決定権をめぐる闘いを前進させ、文化的シーンや大学においても豊かな広がりを見せ、思潮や主体は多様化し、グループの数は増加し、そのネットワーク化もすすむ。女性たちの組織化の力は、1980年の州民投票においても発揮された。そして、「第5部 世界を変えるための仕事 1981-2005」では、ケベックという場から発信される世界の女性たちとの連帯へのチャレンジが語られる。それと同時に、今なお根強く残る性的二重規範の課題であり、世界的課題として、今日のケベックのフェミニストたちが取り組んでいる女性の身体をめぐる諸問題 (ポルノグラフィや売買春の問題、女兒の過剰性対象化、イスラム教のベール問題など) が取り上げられている。

ますます、フェミニズムとは何かという問いに対して、一言で答えることが難しくなる。それは、著者が冒頭で読者に投げかけた「フェミニストとは誰か。フェミニズムとは何か」という問いに、唯一の答えがあることを前提としておらず、むしろ、読み進めことを通して、読者自身が、問いを深めていくことを期待していると考えられる。それと同時に、本書が記すフェミニズムの歴史からは、女性たちは自らの権利擁護にとどまらずに、自ら主体となって女性という視座から見えてくる世界の抑圧的状况に対して、互いに手を取り合い、変革していくための力を育み合って、状況を組み替えていきながら、命を尊重し平和を構築していくことを不断なく実践してきたことが見えてくる。このことから、フェミニズムとは、社会を構築していくための一つの道筋であるともいえるだろう。

## 5. デュモン教育観

上述してきたように、同書では、読者とは、フェミニズムの歴史について

無知であるが故に啓蒙されるべき存在として捉えられているというよりも、著者とともに「フェミニストとは誰か。フェミニズムとは何か」という問いに対する答えの探究を深める存在として捉えられている。このような読者観の背景には、デュモンが、大学における歴史教授法の授業担当者として教鞭をとる中で形成してきた教育観があると考えられる。デュモンは、シェルブルック大学の研修支援課が行った大学教育に関するインタビューの中で、自身の大学教育観について、次のように答えている<sup>3</sup>。

多くの授業を通して、教師たちは、知の源となる人は自分たちではない、大学教育での知の源となる本当の人は、学生なのだということに気がついたのです。学びをつくるのは、学生たちなのです。もし学生たちに学びがないならば、どれだけご立派にふるまっても無駄なのです。授業は失敗です。

このように、デュモンは大学の授業の主体とは、学生であると捉えていることがわかる。それでは、教師の役割とは何なのか。同じインタビューの中で、デュモンは「教師とは、知と、それを自らのものにしていく学生の間をとりもつ仲介者なのです」と述べている。

デュモンは、このような授業観、学生観、教師観を大学教員になった当初から持っていた訳ではない。むしろ、教員になった時は、学びに対して、もっと「簡略主義的」であったと述べている。すなわち、教師の役割とは、一方的に講義で話したり、学生たちを試験によって評価したりする程度に考えていた。それは、自分自身がそうした学び方や、教師の姿しか、知らなかったからである。しかし、歴史教授法の授業を受け持つことになった時、デュモンは、歴史を教えた経験はあっても、教育学については、知識や経験がまったくないことに気がつく。そこで、同僚の「教師教育学」の講義を自分も受講した。その授業は対話を中心にした授業で、デュモンが想像していた大学の授業とは全く異なるものであった。この経験をきっかけに、デュモンは、自身の講義において相互的なやりとりを重視していくことになったのである。したがって、デュモンにとって、大学における教育・学習とは、一方的な知識の教授ではなく、むしろ、教室において展開される対話的なやりとりを通して生まれる知の創造なのだ。以上のような経験を通して形成された大学教育観が、『カミーユに語るケベックのフェミニズム』にも反映されているといえるのではないか。

### おわりにーフェミニストとは誰か

本稿の冒頭で見たように、デュモンは、若い世代がフェミニズムに無関心である様子を決して「無知」と捉えているのではなく、むしろ「かつて自分もそうだった」と、自身に重ねて捉えている。このことは、誰もが最初から性差別に疑問をもつことができるわけではなく、他者との出会いを通してーそれは必ずしも同じ時代の生身の人間だけではなく、時代を超えた様々な人々の姿やその積み重ねてきた思想を通してー、自らの生きる抑圧状況に対して気づきや自覚を得ていくのである。デュモンは、本書の中で、フェミニストを、女性の劣等的な地位は制度や伝統によってつくられているために、それらを変えていこうとする人々と説明していた。しかし、同書で語られたフェミニストたちの物語からは、それ以上の姿が見える。すなわち、フェミニストとは、女性たちの抑圧状況を出発点にしつつ、社会の中で抑圧され、脆弱な状況に置かれた人々の視点から、社会を変革していこうとする人々であった。したがって、フェミニストの姿には完成形があるのではなく、社会の抑圧状況と対峙しようとする営みの中で、そのあり方が刷新され続けるのだ。

しかし、どの時代でも、どの地域でも、不公正な権力の構造の中で、私たちの命は脅かされる。フェミニズムの歴史が獲得してきたものも、いとも簡単に利用されたり、奪われたりもする。だからこそ、私たちは、これまでのフェミニストたちの歩みをふり返りながら、当たり前に見えている現実に関心をもつ感性を育て、他者との対話の中でその関心を深めていく営みを通して、一人ひとりの尊厳をまもり平和を構築していく方途を探究し続けるのだ。本書が、フェミニズム史の入門書である意味とは、まさにこの対話の場を拓き、読み進めるプロセスを通して、読者である学習者自身を、フェミニズムの歴史そして私たちの社会をつくる主体として育てていく点にある。

(やうち ことえ 長崎大学)

### 付記

本稿で『カミーユに語るケベックのフェミニズムの歴史』を取り上げることにしたのは、筆者が同書の翻訳を終えて、立花英裕先生に見ていただいたのが、先生との最後のやりとりになったからであった。先生からは、この本を紹介する文章を書くようにとご指導いただいたにもかかわらず、先生にお送

りすることができなかった。そのため、先生からいただいた宿題として、本稿を執筆することにした。先生のご冥福を祈り申し上げます。

## 注

- 1 Université de Sherbrooke « Micheline Dumont Professeure émérite – Une autobiographie », <https://www.usherbrooke.ca/histoire/departement/personnel/personnel-enseignant/micheline-dumont#acc-15147-1086> (最終閲覧日：2022年3月30日)
- 2 1967年2月、連邦政府はカナダにおける女性の地位に関する調査委員会を設置する。フローレンス・バード (Florence Bird) 委員長の名前をとってバード委員会と呼ばれたこの委員会では、あらゆる女性グループの協力を得たり、多くの女性たちが公聴会に参加したりして、女性問題を明らかにする調査が行われた。
- 3 このインタビューは、シェルブルック大学研修支援課の Youtube チャンネル (Service de soutien à la formation, Université de Sherbrooke) で公開されている。Entrevue avec Micheline Dumont, le 4 octobre, 2017, <https://youtu.be/pwq8v0FdKRQ> (最終閲覧日：2022年3月30日)

## 参考文献

- BERGERON, Marie-Andrée (2009) « Compte rendu de [Micheline Dumont, *Le féminisme québécois raconté à Camille*, les éditions du remue-ménage, 2008, 247 p.] », *Recherches féministes*, vol. 22, n° 2, pp.153-156.
- DUMONT, Micheline (1990) « II. Une perspective féministe dans l'histoire des congrégations de femmes », *Études d'histoire religieuse*, vol. 57, pp.29-35.
- . (2002) *Découvrir la mémoire des femmes : Une historienne face à l'histoire des femmes*, les éditions du remue-ménage.
- . (2005) « Réfléchir sur le féminisme du troisième millénaire », dans Maria Nengeh Mensah (dir.) *Dialogues sur la troisième vague féministe*, les éditions du remue-ménage, pp. 59-73.
- . (2008) *Le féminisme québécois raconté à Camille*, les éditions du remue-ménage.
- DUMONT, Micheline et le Collectif Clio (1992) *Religieuses sont-elles féministes ?*, *Histoire des femmes au Québec depuis quatre siècles*, Éditions du jour.
- DUMONT, Micheline et Louise TOUPIN (2003) *La pensée féministe au Québec*, les éditions du remue-ménage.

- HÉBERT, Karine (2009) « Compte rendu de [Micheline Dumont, *Le féminisme québécois raconté à Camille*, les éditions du remue-ménage, 2008, 247 p. ] », *Revue d'histoire de l'Amérique française*, vol. 62, n° 3-4, pp.571-574.
- PAGÉ, Geneviève, Claudie SOLAR et Eve-Marie LAMPRON (2018) « Les pédagogie féministes et les pédagogies des féminismes : une mise en perspective », *Recherches féministes*, vol. 31, n° 1, pp.1-21.
- SOLAR, Claudie (1992) « Dentelle de pédagogies féministes », *Canadian Journal of Education / Revue canadienne de l'éducation*, vol. 17, n° 3, pp.264-285.